

# たぐみ

## Craftsmanship

沖縄・読谷壺屋のやきもの  
特集 金城窯三代展

第15号

### 尚順男爵と

### 泡盛の古酒

泡盛も焼酎も近ごろ古酒が人気である。ワインやウィスキーも昔から年度や銘柄がやかましかったが、ヴィンテージものの保存と熟成は、本来はなかなか難しいものらしい。

泡盛の古酒(くうしゅ)の熟成法について最初に公に記したのは、琉球王家の一族である尚順男爵であった。尚順氏は昭和十四年、柳宗悦ら民藝協会同人が沖縄の工藝文化の調査のため大挙して渡琉した際、何かと世話をされ、尚家の松山御殿へも再々招待された。

古酒中の銘酒も鶴瓶に入れて献じられたことと思うが、民藝協会の諸先生に酒を嗜む人少なく、沖縄料理や芸能のことしか記録にはない。

その代わりといつては何だが、尚順氏自身がその年十一月号の「月刊民藝」の琉球特集号に「古酒―泡盛について」

という一文を寄せている。

尚順氏は、古酒を沖縄の宝物という。古酒を造るには最初から此れに注ぎ足す用意として、少くも二、三番乃至四、五番迄の酒を造っておきながら、数百年の間の蒸発作用による酒精の減量分を注ぎ足し、常に細心の注意をもつて本来の風味を損じないよう貯蔵する苦勞を知つたら、誰しも此れに宝物の名称を冠するに異論はなからうと記した。

古来沖縄では古酒は家格の象徴でもあり、これの管理や注酌までも主人のみの権利であつたという。筆者も昭和四十七年正月、首里の名亭で一盃の古酒をご馳走になつた。琥珀色の、強くまろやかな一献であつた。これほどの古酒は今はないのであろうか。

尚順男爵は太平洋戦争中、沖縄決戦を控えて本土への疎開を断り、松山御殿で多くの県民と運命を共にされた。尚男爵の沖縄の歴史と文化、そして県民へ寄せた愛と使命感には思うたびに心打たれるのである。(志賀直邦)

# 沖縄・読谷壺屋のやきもの 金城窯三二代展

― 金城次郎・敏男・吉彦・博美・吉広 ―

会 期 平成十六年十月二十三日(土)〜三十日(土)

十月二十四日(日)は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ 二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

日曜日・最終日は十七時半まで



カラカラ(敏男) 台皿(吉広)



そば猪口(吉彦) 香合(次郎) 馬上杯(博美)

よみたんつぽや  
読谷壺屋・金城窯三二代展  
開催に当たって

金城吉彦

今回、銀座の「たくみ」にて祖父金城次郎、父金城敏男、子私吉彦、弟吉広、私の妻博美など家族の三代展を開催するに当たって、私たちの窯の由来について紹介したいと思います。

まず私たちの焼物は、沖縄の陶芸で「読谷壺屋焼」という名称で呼んでいきます。「壺屋焼」という名前の前の読谷というのは、祖父次郎が、那覇市の壺屋で登り窯を共同で使用させてもらっていた頃、沖縄の祖国復帰を境に壺屋での登り窯の使用が、住宅密集、煙害問題などで焚けなくなっただため、読谷という土地へ移住し開窯の運びとなりました。

それから三十数年、この地で壺屋の焼物を、祖父、父、私たちと受け継いで焚いています。今はこの地は、那覇の壺屋と肩を並べるくらい焼物の盛んな所になっております。

## 沖縄の陶器と金城窯

神保郁夫

人々の生活と蜜接に関係する工芸品は、その時代の社会環境や生活環境を反映しながら形成される。時として、時代の変化に対応できず消えさる物、また大きくその姿を変える物、様々である。沖縄の陶器も同様で、王朝時代から今日に至るまで多くの荒波を乗り越えながら継承、発展しつづけてきた。



魚文彫りの金城敏男さん

沖縄の陶器は、一般的に産地である那覇市郊外、壺屋地区の名前から「壺屋焼」の名称で、現在、多くの人々に親しまれている。しかし日本が近代化を迎えた明治期は、沖縄も琉球国として独立した国家から日本の行政に組み入れられたことにより、王府の庇護もなくなり、本土の窯と同様に疲弊して

いった。庶民の食卓に供するため壺屋で生産されていた食器類は、安価な商品が大量に流通し、大打撃を受けることとなった。こうした厳しい状況の中で、陶工達は創意工夫をし、伝統的な技術の継承に努めてきたのであ

った。

しかし昭和二十年、米軍の上陸により沖縄は民間人を伴った国内唯一の地上戦が繰り広げられ、人命はもとより、首里城を中心とした古い街並みは、砲弾により原形を留めることなく破壊し尽くされ、多くの財産を失った。

その中で幸いにも、壺屋地区は奇跡的に焼け残り、沖縄の復興の為、陶工たちは窯の炎を点し、人々の日用品をいち早く供給したのである。

今回、銀座たくみで展覧会を開催する次郎さん、そして長男の敏男さんもまた、沖縄復興の為、戦後の壺屋を担った代表的な陶工といえよう。

\*

戦後の沖縄陶業の中で、金城窯の功績とは何かを考える時、次郎さんの沖縄県初の「人間国宝」指定ということよりも、登り窯にこだわり、その炎を消さない為に、壺屋の地から沖縄県中部の読谷村に移転することを英断した



魚文コーヒ一碗、海老文花瓶（敏男）

ことが、最も重要な出来事であったろうと考える。

戦後、那覇の町は拡大し、壺屋の周辺は本土復帰頃には、戦前の半農、黍畑の風景から住宅、商業地へと変貌しており、登り窯が排出する炎と煙は、一種の公害問題として取り上げられていた。こうした中、当時の壺屋を支えた小橋川永昌、新垣栄三郎、金城次郎等は、その対応に苦慮しており、最終

的に、次郎さんは、かつて、琉球が三つの王国に分立していた時代の中心都市の一つであり、その近くに「喜名焼」と呼ばれる沖縄では最も古い窯跡がある読谷村に移転を決断したのである。

そして復帰後の壺屋焼の流通拡大、若手の読谷移住、そして次郎さんの人間国宝の指定等が相俟って、現在の読谷村「やちむんの村」が形成されたのである。その勢いは、壺屋地区以上となっている。しかし、壺屋に留まった小橋川永昌、新垣栄三郎等、王朝時代からつづく窯元が、父祖の地に根を下ろし、また後継者も今日に至るまでしつかりとした活動を継続していること

が、今日の壺屋焼、沖縄の陶業の発展に繋がっていることを忘れてはならない。

\*

さて、金城窯の特徴とは何かを考え、厚手の生地に、魚文を中心とする線彫り等の技法で絵付けした雑器

を想起させる。この作風は、近年、沖縄の陶器全般の傾向となつてきているが、本来、沖縄の陶器は、柳宗悦が評したように、素材となる陶土も「上焼」「荒焼」など変化に富み、技法も「赤絵」「象嵌」等、様々な技法に富んでいた。

こうした伝統を消化して、金城窯は形成されてきたわけであるが、本稿では、これ以上、作風については触れることはとどめたい。

今後、窯の伝統を継承する敏男さんの子息たちが、厳しい社会環境の中で、次郎さんや敏男さんの姿をみながら、たくましく、どのような物を作つてゆくのか大いに期待される。今回の銀座たくみでの展覧会は、敏男さん子息の全国デビューの第一歩であり、沖縄の陶器に関心を持つ誰もが、更なる金城窯の飛躍を願っているのではないだろうか。

（神社本庁教務課長／国学院大学日本文化研究所共同研究員）

## 濱田庄司と金城次郎

志賀直邦

金城次郎さんの仕事と人柄を語るに  
さいして、濱田庄司との深い結縁を抜  
きに考えることは出来ない。

濱田が河井寛次郎とともに初めて沖  
繩に渡航し、壺屋を訪れたのは大正七  
年、二十四歳のときであった。このあ

と二人は、柳宗悦とバーナード・リー  
チを知り、やがて共に民藝運動をはじ  
める。濱田は特に沖繩に愛着をもち、

大正十三年、新婚旅行で再訪する。そ  
してそのまま一年余り那覇の壺屋の地  
に居を定め、作陶を行っている。この



魚文マカイを仕上げる金城次郎さん

とき、濱田が仕事場としていた新垣榮  
徳の工房で下働きの雑用をしていた次  
郎少年こそ、のちに琉球陶器の人間国  
宝となった金城次郎であった。

柳、河井、濱田たちが工藝調査のた  
めに再々訪れるようになった昭和十四、  
五年頃、金城次郎は新垣榮徳の窯です  
でもっとも熟達した職人として認め  
られていたが、民藝の同人たちを何よ  
りも驚かせたのは、彼の人柄と作風の  
闊達な自由さであったという。

河井はのちにこう書いている。

「次郎は珍しい位よく出来た人で、気  
立てのよい素晴らしい仕事師である。轆  
轤ならばどんなことでもやってのける。  
彫ったり描いたりする模様もうまく、  
陶器の仕事で出来ないものはない。」  
(「琉球の陶器」所収)

金城次郎は戦後の二十一年一月、壺  
屋の復興と共に榮徳の窯のそばに自ら  
の窯をもち独立する。

その頃の沖繩は壊滅的な戦禍からよ



魚文花瓶（高33 cm）

うやく立ち直りつつあったときで、那覇周辺の復興につれて、やきものの町壺屋も仕事に活況がみられるようになっていた。それは何よりも米軍の統治下にあったがために本土から日用雑貨を移入することが出来ず、ほとんどの品を自給自足するしかないという事情にもよった。

昭和二十年代、壺屋は日用品としての食器づくりに忙しく、飯碗（まかい）や鉢（わんぶう）や皿などをはじめ、



呉須釉茶壺（高41 cm）

泡盛用のかめや徳利、葬儀用の厨子がめにいたるまで、おびただしい量の陶器で賑わったという。

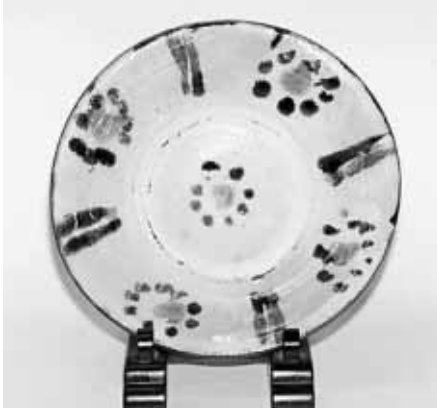
沖縄県立芸大の工芸研究所長をつとめた柳悦孝によれば、その頃の壺屋の品々は、近代以降の沖縄の陶芸の歴史のなかでも、もっとも健全かつ生活的で、しかも美しさに満ちていた時期ではなかったかという。それはすべてのものが実用に供するために作られていて、鑑賞や観光品としての遊びや妥協

がないという点で、本物の民藝の成り立つ健全な環境がよく備わっていたということではないかと思う。

金城次郎の窯もまた、それなりに忙しくはなっていた。次郎は轆轤（ろくろ）はもとより、模様つけ、釉がけ、窯焚きのすべてにわたって練達者であったから、やきものづくりの量や早さでは誰にも負けないものがあつた。だが初めの頃は彼の作品の自由闊達な面白さを理解する人も余りなくて、せつかく窯を出しても品物のあらかたが売れ残るということもあつたらしい。

次郎さんの作品はあらゆる種類の食器から大皿、厨子がめまで多岐にわたる。とくに魚や海老を彫り文に施した大皿は、濱田庄司が無類と激賞したほどであつた。

技法もまた多彩であつて、やきものの主な手法はほとんど何でもこなす。染付はもとより彫り文、象嵌、流し釉、陰刻、指描き、いっちゃん、貼り付け文、



点文大皿 (径 33 cm)



海老貝文大皿 (径 36 cm)

とびかんな、赤絵などさまさまで、模様もじつに自由である。彼は職人であつて、ただの職人ではない。自由で、自らの心と腕のおもむくままに作る。そこにあの濱田庄司が驚嘆し、惚れこんだのであろう。

そしてその濱田たちからの引きもあつて、彼は昭和二十七年頃から沖展や日本民藝館展などへ出品するようになり、金城次郎の名は次第に本土の民藝愛好家のなかに知られるようになった。

た。

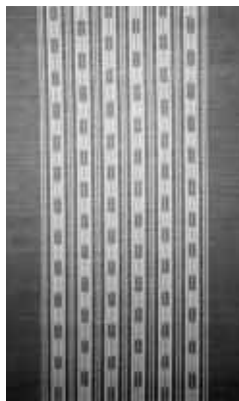
だが濱田は、次郎の仕事の真髓がまだ充分に人々に知られていないとの思いを常に抱いていたようである。目利きの多い東京で、次郎の仕事を紹介したいという濱田の願いは、まず昭和四十五年五月、三越本店での「沖繩壺屋三人展」という形で実現する。この三人というのは、赤絵の第一人者小橋川仁王と新垣栄徳の息子栄三郎、それに金城次郎であつた。

この会のために濱田は、沖繩でそれだけの窯出しに立ち会い、その過半を自らの手で選んだのであつた。そして翌四十六年十二月十四日から、東京たくみで、金城次郎の初の個展が開催された。そしてさらに四十七年三月、三越で第二回目の「壺屋三人展」が開かれたのであつた。

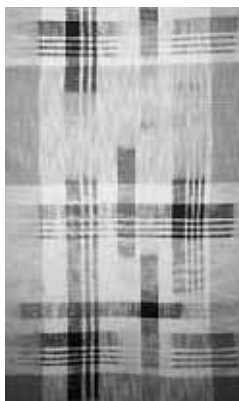
これら三回の展覧会は、いずれも濱田庄司が壺屋でじかに選んだものがほとんどであつた。私も三回とも実務を担当し、四十七年一月には本土復帰前の沖繩に出張、壺屋や紅型、芭蕉布などをはじめ、まだ米軍統治下であつた沖繩本島の各地を訪れる、まことに得がたい経験をさせていただいた。今回金城窯三代展を開くにあたり、その時を思い起こし感無量をおぼえる。

展覧会の出品作品(本誌掲載品を含む)の詳細については、<http://www.kinokawaya.com> (03-3571-2017) 担当世川、豊岡、千野までお問い合わせ下さい。

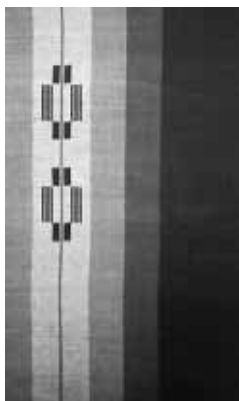
たくみ歳時記  
石垣島の絣座布団地



クール染絣絣



クール染井絣絣



藍染絣

沖縄の石垣島の山中に自生する、ヤマモモやクール芋などの草木を、深石隆司さんが採集し糸を染め、奥さんの美穂さんがデザインし織り上げた、幅五十九センチ程の座布団地です。

右は藍の濃淡染め分けにワンポイントの絣、銘仙判座布団一枚分一四、七〇〇円。真ん中はベージュ地にこげ茶の手結絣、一枚分二一、〇〇〇円。左は両脇こげ茶で中が絣入りの茶と藍の縞、一メートル一五、九六〇円です。

厚手の木綿でしつかりと織つてあるので、いつまでも風合いを保ち、肌触りと色で、南風を感じ、生活に楽しみを与え続けてくれます。

今年から、工房の一部を開放して、一般の方にも染や織りを体験していただくエコツアーを企画しています。島の自然散策をし、染材となる草木を採つて染色、作品作りまでお手伝いをお願いします。要予約。詳しくはたくみまでお問い合わせ下さるか、左記、からん工房ホームページをご覧ください。(と)

<http://homepage3.nifty.com/karan/>

あとがき

今号に一文を寄せられた神保郁夫氏は、金城次郎、敏男さんはじめ三代の皆さんと親しく、また沖縄の陶器全般についても造詣の深い方である。沖縄の風土、文化に深い愛情を持っている人は多くまことに心強い。

さて、沖縄最後の王族といつていい尚順男爵は、私の最も尊敬する先覚の一人である。先年、東京の美術倶楽部で「尚順男爵家・御所藏品展観」と表題のある図録を入手した。紅型風の木版の表紙の和綴本で、昭和十五年十一月十二日より大阪高島屋で催された売り立ての際のもの。尚男爵を偲び、折をみて別文を草したいと思う。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一二  
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七  
FAX 〇三―三五七―二一六九  
振替 〇〇―一〇―二―三五六五九  
定価 六〇円(税込)